

# 垣内をめぐる村落祭祀と座

——奈良市大柳生町の事例より——

岸 田 史 生

## 一、はじめに

現代社会において、冠婚葬祭時の席順は特に注意が払われる場面である。伝統社会においても、祭祀儀礼や寄合の席順というものは特に規律が厳しいものと思われる。たとえば、越後秋山郷の庚申講では、「年寄が上座というような年齢順ではなく家による順なので、世代を超えて変わらず固定されている」（町田 一九九七）という。かつて、年齢階梯制村落のモデルケースとして紹介された伊豆の伊浜でも、観音堂祭において座的な集団が形成される。イトウの本家の家が固定しており、座の席順にも特定の序列が存在するのである（蒲生 一九五六）。また、近代の民衆史を描きだした中村政則氏は「封建的主従関係にも似た地主と小作人の関係は、村のさまざまな慣行にもつらぬかれていて、それが一つの村の秩序というものをかたちづくっていた」（中村 一九九八、八三頁）として、次のような話を紹介している。「村の寄合などの席次も、旦那さんがいちばん奥の正座につく。つぎは親方さんがすわる。以下、広間から台所にむかつて、自作・自小作・小作の順ですわるというのが慣わしだった。旦那と親方とを総称して頭分ともよんで、部落の運営は、この頭分によっておこなわれていた」（中村 一九九八、八四頁）というものである。以上は新潟県や静岡県・鳥取県の事例であり実年代も様々であるため、近畿地方の宮

座と同レベルでは比較できないことはいうまでもないが、日本社会における座・座席・座順というものの持つ意味をあらためて考えさせられる。<sup>(1)</sup>

筆者の当面の課題は、近畿地方の宮座組織にみられる「座順」である。ここでいう座順とは多義的なもので、座入りの順番のこと・役割分担の順番のこと・座席の順番のことなどをさす。宮座の座順の一般的特徴は、座入りの順番がその座席の順になっていること、すなわち、宮座に参加できるものであれば、年数とともに自然と座順も上位に昇ってゆくということである。だれもが順番に上座に着くことが出来る慣行を維持しているのが近畿地方の村落の特徴であるといえる。近畿地方の村落はこれまで対等的・平等的関係のみられる村落、いわゆる当屋制村落として位置付けられてきた。<sup>(2)</sup>しかし、裏をかえせば、対等的・平等的関係が村落レベルにおいて強調されるため、かえって村落空間内の緊張関係を生じさせてしまうのではないだろうか。<sup>(3)</sup>ここでいう対等的・平等的関係とは、実質的なものではなく形式的関係を示すと考えられ、そのための緊張緩和システムが必要であったと思われる。上座を独占させないために当番制の導入がはかられたのが宮座組織であったのではないだろうか。これまでも座順については、肥後和男氏の『宮座の研究』（肥後 一九六八）や原田敏明氏の『村の祭祀』（原田 一九七五）『村祭と座』（原田 一九七六）等で指摘されてきた。しかし、その座順と社会生活との関係は取り上げられていない。そこで本論では、一先ず社会生活の拠点である生活地域集団（垣内）の分析を行なう。そして、別稿で垣内が結集した地域社会において運営・維持されている宮座組織の分析へと進みたい。

さて、近畿地方の村落社会には垣内（カイト・カイチ）とよばれる地縁集団が多く存在する。これまで奈良県の垣内に関しては、本分家関係・講・寺の視点から分析した社会人類学の蒲生正男氏の成果がある（蒲生 一九五二）。蒲生氏の拠点は親族構造の分析にあることはいうまでもないが、ここでの分析はトウマイリといわれる先祖祭祀と垣内の交際関係について記述されたものである。さらに垣内の歴史的展開を分析した歴史民俗学の竹田聰洲

氏『民俗仏教と祖先信仰』（竹田 一九七二）の成果がある。竹田氏の手法は文献史料を用いた歴史的視点にあり、その対象は祖先信仰の結節点としての民間寺院成立へと向けられる。<sup>(4)</sup>これらの成果を批判的に発展させようとしているのが法社会学の森謙二氏である。森氏は近年『墓と葬送の社会史』（森 一九九三）や『共同体・宮座・家族―奈良県山辺郡都祁村吐山村・針報告書』（森 一九九七）を著した。森氏の関心は村落祭祀（氏神と宮座・先祖と墓）と親族構造の分析に寄せられる。その視点は個人を指標とした村落構造論にあると思われる。<sup>(5)</sup>

村落構造論を展開するにあたって、ムラ概念を如何に規定するのかわという問題にぶつかる。社会経済的な側面を強調するのか、祭祀的側面を重視するのかによって展開される概念は異なってくることはいうまでもない。現在の話者の認識レベルにおいても、社会経済的側面と祭祀的側面の見方によってムラ意識が異なってくることは想定できよう。本論からは垣内が村落共同体であるかどうかの判断はできないが、垣内という名称に捉われることなく、集団適正規模によって様々な分裂・統合を繰り返すものが生活地域社会Ⅱムラだといってよからうと考えている。本論は、宮座と村落社会を考えるうえにあたって、まず生活地域集団としての垣内を取り上げることにする。

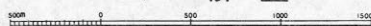
## 二、垣内の儀礼と領域

### 1、地域概況

本論文で対象とする地域は、奈良市の東高原に位置する大柳生町である（図1）。近世に入ると文禄四年（一五九五）の検地、いわゆる太閤検地によって神戸四ヶ郷が解体され村高が決定される。大柳生村は一二〇九石余りで近世を通して春日領であつたが、その他は忍辱山村が四六九石・大平尾村が二六五石・大慈仙村が二一〇石・坂原村が九四五石がその時の石高で、幕府領・津藩領・柳生藩領・郡山藩領などに分割支配されていた（今崎編 一九五八年、一一〇―一三頁）。『享保六年（一七二一）の『大柳生村田畑町反畝高 人数之帳』によれば、石高は一二〇



1:25,000 柳 生



平成 2 年 12 月 1 日 発行 (3 色刷) 2 刷  
著作権所有兼発行者 国土地理院 許可なく複製を禁ずる

図 1 大柳生地地形図

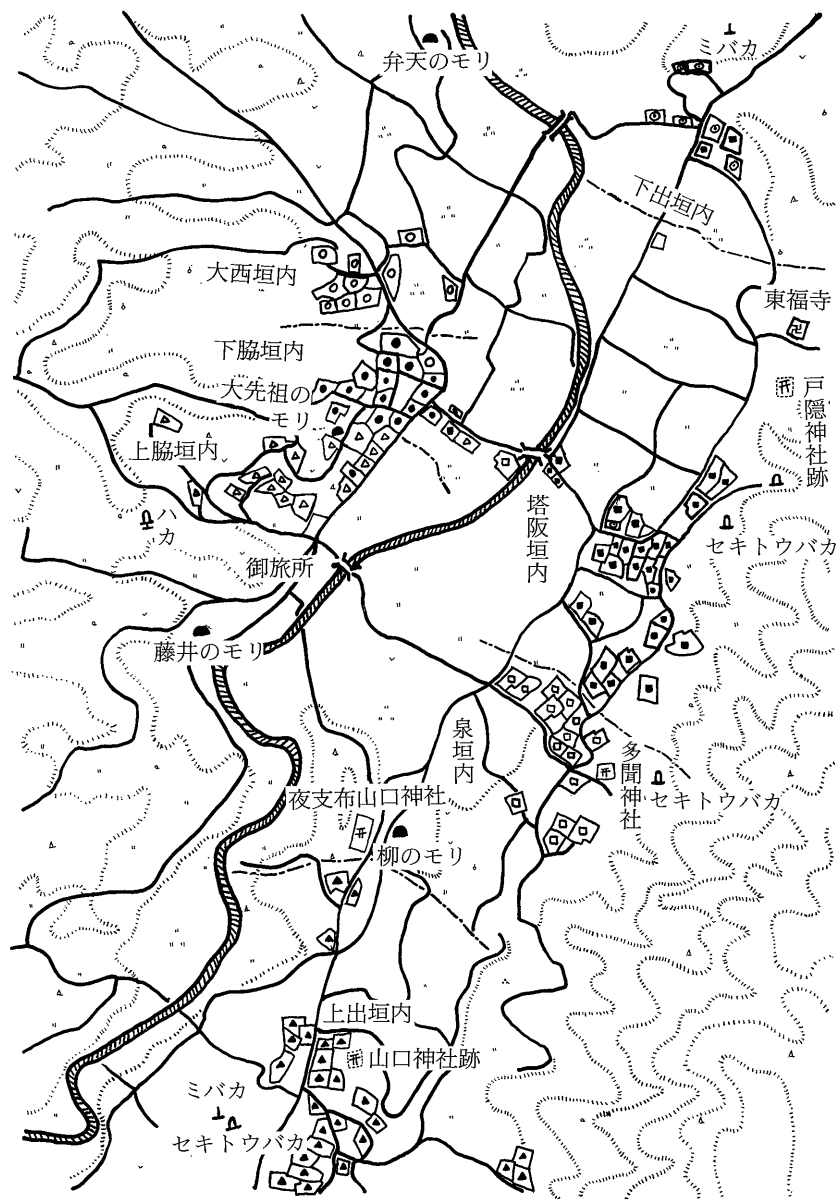


図2 大柳生集落図

九石余りで、神主三人、出家一〇人、男三二六人、女三〇〇人、計六三九人を数えている」(鹿谷 一九九〇)という。

集落は垣内という生活地域集団に分かれており、現在、上出・塔坂・泉・下出・大西・下脇・上脇という七垣内が存在する(図2)。「このうち泉垣内は南北朝期に一乗院方荘園として現れる『和泉殿垣内』に比定できる垣内で、独自に氏神多聞神社(旧八王子神社)を有し、大柳生とは生活組織を別に行っている。残りの六垣内で、上出垣内の北のはずれのコウノモリ(神野森)に鎮座する夜支布山口神社(大柳生町字神野宮、祭神素盞鳴命)を祀る」(鹿谷 一九九〇)。この夜支布山口神社の宮座組織に関しては別稿において分析を進めたい。

## 2、垣内の儀礼

大柳生の日々の生活は垣内を基本単位として行なわれている。まず一年の年頭行事として注目できるのは、カンジョウカケ(勧請掛け)とよばれる行事である。これは他村に通じる旧道との境に注連縄を掛けるものであるが、いわばムラ人たちの精神的な村境意識があらわれたものである。

上出垣内の例であるが、一月九日に組頭とネンニョウが集まって勧請縄を作り、忍辱山との村境に掛けていた。

現在は行なわれていない。泉垣内の場合、一月六日に垣内の戸主たちがネンニョの家に午後から集まって初日待を行ない、御幣を中心にタコなどを吊して多聞神社のそばに勧請掛けを行なう。塔坂垣内の場合、一月七日の午前中に垣内の組頭とネンニョウが集まって勧請縄を作り、東福寺の前に掛けている。勧請掛けが終わると初日待がネンニョウの家で行なわれる。次に下脇垣内であるが、まず一月七日に各家から代表者が鯛の焼き物などを持って垣内寺である円城寺に集まり会食をし、その後、下脇の氏神さんであつたというオセドサンへお参りに行き、再び円城寺に集まり勧請縄を作る。この準備はニンニョウが行なう。そして、出来上がった勧請縄と御神酒・米・塩・

鯛などを入れたタケダルを持って弁天さんの所に行き、勧請掛けをする。上脇垣内は正月の新年会にムラ人が集まってミツヨリの注連縄を作って、檜の木やネンブリの木で拵えた鋤や鍬をぶら下げて藤井のモリと山手の須川に通じる道に勧請掛けをしたという。

トンドは各垣内で行なわれるのであるが、さらに垣内の中でも二つ三つに分かれて行なわれている。かつて下脇垣内では、各家から竹を一本ずつ持ち寄って櫓を組んでトンドを行ない、その後はトンド日待といって垣内寺である円城寺に戸主が集まって会食していたらしい。

三月の彼岸頃にミチツクリ（道作り）という行事があり、おもに畔道の修復や用水路を補修を行なう。上出垣内ではこの道作りが済んでから、会所の横にあった真言宗の南明寺という堂で涅槃講をやっていた。これは各家から一人ずつが参加し、男の最年長者が念仏を唱えて、御飯を釈迦に供えて拝み、その後は皆で会食をするというものである。塔阪垣内や泉垣内・下脇垣内では、涅槃講は子供たちが中心となつて行なわれている。塔阪垣内の事例をみると、垣内の十五歳になった年頭の男の子のいる家が宿を勤め、その家で御飯を炊くのである。米は子供たちが袋を持って垣内中の家々から集めて廻る。泉垣内でも十五歳になった男の子がいる家がタキバンを勤め、二人以上いたら話し合いで決める。そして、子供たちが垣内中の全戸から米とお金を「ネハン、ネハン」と言いながら集めて廻り、宿の家では涅槃の掛け軸を掛けてお祀りする。この掛け軸は申し送りとなつていて、前年の年頭から受け取るのである。

六月に入るといよいよ田植えの時期となり、家の者が総出で田植え作業に従事する。大柳生の場合は、田の一枚の所有が錯綜しており、共同で田植えに当たることはない。ただ早く終わった家が他の家の田植えを手伝ったりすることはしばしばみられる。そして、大柳生の全垣内で田植えが終了すると、六月二十四日はウエツケヤスミとなり、自治会長を始めとして春日大社へお参りに行く。翌の二十五日はノヤスミであり、二十六日がムシオクリ

である。この虫送りは田の植え付けが済んで害虫を駆除するために、古竹の松明や高張り提灯・太鼓を各垣内で打ち鳴らしながら徐々に各垣内が合流していき、そして最後には白砂川の田中橋に集合するのである。「虫送りには、大柳生の全垣内が参加した。白砂川のふちへ松明を持って行き、神社、茶の工場、田中橋など決まった場所で大太鼓の曲打ちがおこなわれた。上出垣内、塔阪垣内、西側、泉垣内の四つの大太鼓を並べて同時に打った。一つの太鼓は五人が交替で打った。太鼓打ち以外にも、鉦を打つ役、合図をする役の人がいたという」(佐々木・廣井 一九九〇、五九頁)。

夏には盆の様々な行事が行なわれるが、墓参りを一例にみることにする。大柳生はいわゆる兩墓制慣行がみられる地域である。上出垣内は独自で埋葬地(ミバカ)と石塔建立地(セキトウバカ)をもっており、泉垣内・塔阪垣内・下出垣内のセキトウバカはそれぞれの垣内毎にあり、ミバカは三垣内の共同入会地である。また西側については三垣内共同入会の単墓制(ハカ)であるが、現在、手狭になってきているため埋葬地と石塔建立地を別にしようという話が持ち上がっているという。いずれの墓制慣行でも、その墓地(特に埋葬地)の所在はムラの外れに位置している。墓参りは盆の八月十四日と十五日で、石塔建立地であるセキトウバカと埋葬地であるミバカの両方へ参るといふ。埋葬の区画は昔から家別に決まっており、大和東高原に顕著であるといわれている年齢別の埋葬区画<sup>(註)</sup>はここではみられない。

八月十七日の夜、トウヤ宅の庭先で太鼓踊が行なわれる。踊は夜支布山口神社の氏子として座入りした垣内の男子によって踊られ、上出垣内・塔阪垣内(希望があれば下出垣内)・西垣内(上脇・下脇・大西の三垣内)ごとの三種類が別々に伝えられている。その年のトウヤが所属する垣内の者が踊を奉納することになっている。太鼓踊の準備は、自治会長がトウヤに太鼓踊奉納の是非をうかがうことから始まるという。その時の口上は、まず自治会長が「垣内一同、太鼓踊を奉納させていただきますかと思いますが、お家のご都合はいかがでございましょうか」と伺



写真 1



写真 2



写真3



内では「大じゅんやく」「大ぜんおどり」「しのびおどり」の三曲が、塔阪垣内では「大神踊」「忍び踊」「小ぢんやく」の三曲が、西垣内では「屋敷踊」「山伏踊」「若武者踊」の三曲が踊られている。太鼓踊の踊子たちは、夜支布山口神社の座入りした垣内の者の中から若い順にその役を勤めていく。垣内で座入りした者が少ない年は再び踊手にならないといけない。太鼓踊に参加するのは踊子だけではなく、その母親や妻子・恋人たちも含め、年寄から子供までが盆の行事として楽しんでいる（写真1・2・3）。また、太鼓踊の前日と当日は、ヨビ衆として垣内の者や親戚関係の者が招待され接待を受ける。トウワタシの日にもヨビ衆が呼ばれ、昔は秋祭の前々日もラクサクと称してヨビ衆を慰労したという。このように親戚や手伝いの人をヨビ衆として慰労することはトウヤの勤めであり、

うと、トウヤは「ありがとう奉納をお待ち申します。ご苦労様ですが、よろしく願います」と答える。それから後に各家から一人ずつが参加して集会がもたれ、練習の日程や役の振り分け、費用の分担などが話し合われる。西垣内の場合は、組頭とネンニヨウが太鼓踊の費用を算出し、西側の戸当たりの費用を計算する。太鼓踊のあとの夕食などの接待の費用はトウヤが負担する。現在、上出垣

太鼓踊は夜支布山口神社のトウヤ（明神さん）に対して、その氏子である垣内の人々によって奉納されるのであった。

秋の九月七日には、下脇垣内の五人年寄が一年交代で、御神酒やヨウカン・鱈の焼いたものなどを五種類入れた袋とタケダルを持って弁天のモリへ行く。そして掃除をしてから祝詞をあげ、それが終わると今度は藤井のモリへ行き同じことをする。

また秋にも道作りが行なわれる。下脇垣内の場合は十月の初旬で、午前中にタキバンが弓張り提灯を持って「道作りをしますが、お宅のご都合はどうですか」と垣内の一軒一軒を聞いて廻る。午後からは垣内の本座が開かれる。十月十七日と十八日は夜支布山口神社の秋祭である。この夜支布山口神社には、垣内の座とは別に神社の座が行なわれている。詳しい分析は別稿に譲りたいが、十五歳になった男子は宵宮の日に座入りを行なう。この座入りの順番にしたがって様々な神社の役割が分担される。さらに長老衆に参加するのもこの座入りの順番であって、マワリ明神を勤めるトウヤも座入りの順番である。このように垣内の枠を越えた大柳生町（旧大柳生村大字大柳生）としての結集であり、夜支布山口神社の祭儀に関する役割が座入りの順番によって平等に分担されているのが特徴である。

### 3、垣内の領域と結集

大和地方の都祁村を調査分析した森謙二氏は、竹田聴洲氏が垣内を一つの村落共同体として捉えたことに對して、「垣内が『村』を私称しているとしても、垣内が独立した『村落共同体』として存在していたかどうか別のファクターを入れて考えなければならぬ」（森 一九九七）として、「垣内は、垣<sup>マワリ</sup>常的にまとまりを持った集団であるのではなく、その適正規模よって分裂と統合を繰り返すのである。この意味において、垣内の存在は相対的であり、

垣<sup>かき</sup>常的な集團とは言い難いのである。垣内は、その領域が明確ではなく、分裂と統合を繰り返す集團である。このように不安定な構造を持つ垣内は完結した共同体であるとは言い難い」（森 一九九七）と指摘する。また、「村落共同体として認められるには、それがどのように形成されたものであるかどうかは別にしても、ムラとしてもまとまりを持つ、一定の条件が必要であるだろう」（森 一九九七）として次のような条件を提示する。第一に「ムラの領域が確定されていること」。第二に「ムラの意思を決定する一定の機関を持つこと」。第三に「ムラの構成員としての資格が明確であること」。第四に「ムラの構成員たちが共通のHabitusをもつこと、いわば年中行事を共有すること」。以上の条件からも垣内はいくつかの条件を満たすが、個々の垣内はムラ祭祀の一定の役割を担うが、垣内内部でその完結した体系を持ったわけではないとして、「吐山の七垣内（現在は九垣内）が一つのまとまりを持った村落共同体であり、垣内はその下位集團である。（中略）この地方の村落共同体はいわば垣内の連合体としての性格を持つ」（森 一九九七）と指摘する。

以上のような森氏の分析を念頭において、大柳生の垣内をみると次のようなことが想定できるであろう。まず第一に垣内の内部世界と外部世界をつなぐ旧道には、勧請繩を掛けて心意的村境とでもいうべきものをつくっており、また、かつては現実の政治的村境として堀切を設けて榜示<sup>はうし</sup>をすることを取り決めていたこともあった（奈良市史編集審議会 一九六八、三〇～三一頁）。このように垣内は心意的にも現実的にも村境を設けて外部社会とは隔たった領域形成を行なっていたのである。第二に垣内で行なわれる行事をみると、垣内ごとに行なうものが多いことに気付く。たとえばヒマチャトンド・ミチツクリ・涅槃講等である。いわば垣内祭祀とでもいうべき行事である。しかし、虫送りなどの行事からもわかるように、全く垣内独自の行事とはいえないものもある。これは各垣内から追いついてきた害虫を、最後は田中橋のところで白砂川へと追い落してしまうのであるが、この事例は垣内の領域内部にも村境的な空間が存在することを示すとともに、垣内独自では生活が営まれないことを

写真 4



示しているのである。夏の盆行事として墓参りがあるが、垣内独自に埋葬地と石塔建立地をもっている垣内と共同埋葬地をもつ垣内に分かれる。さらに盆踊としての太鼓踊が行なわれているが、これも一垣内単独で踊られる場合と、三垣内共同で踊られる場合がある。なお、夜支布山口神社に合祀されている山口神社はもと上出垣内の氏神、立磐神社はもと西垣内（大西・下脇・上脇垣内）の氏神、戸隠神社はもと塔坂垣内の氏神であったといわれている。そして、垣内ごとに氏神があつた名残りであろうか、現在、氏子総代は旧氏子域（①上出垣内から一人②塔坂垣内・下出垣内から一人③大西垣内・下脇垣内・上脇垣内から一人）から一人ずつ選出されている。

このように大柳生における垣内の領域構成をみてみると、白砂川をはさんだ西側の大西・下脇・上脇の各垣内は一つの連合垣内としての性格が強いことがわかるのである。事実、太鼓踊の提灯には「西垣内」と記されており（写真4）、もともとの氏神も立磐神社であるといわれている。景観的にも三垣内は集落が隣接しており、本分家関係も錯綜している。一方、上出垣内は景観的に独

立して存在しており、独自の氏神伝承や太鼓踊・墓地を維持している。塔阪垣内は白砂川東側に位置し、ここも独自の氏神伝承や太鼓踊を維持している。下出垣内は塔阪垣内の分家であるといわれており、太鼓踊も希望があれば塔阪垣内に組み入れられて行なわれるという。墓も塔阪垣内と共同である。泉垣内は氏神を別に祭祀しており、大柳生の垣内のなかでは最も独立性が高い。

また、先に森氏という領域とは地理的範囲のことであって、A垣内に属した者が分家をした場合、地理的にはB垣内に属しても交際はA垣内の構成員として行なうとして例を取り上げ、垣内の構成が純粹に住所地で決定されているわけではないことを指摘している（森 一九九七）。大柳生においても同じような事例がみられるが、逆にいえば地理的な範囲を越えてまでもその構成員として存在するのであって、ここに精神的な結集原理の反映をみることは出来ないだろうか。

大柳生の垣内は森氏のいうムラとしての条件は一部分満たすが、全部ではない。ここで大柳生の垣内はムラではないということも可能であろうが、ムラ概念等の再検討が残されているため結論は控える。今いえることは、村落共同体としてのムラであっても、構成員の増加や様々な要因によつて、分裂統合を繰り返すものであって、垣内独自にみられる現象ではないということである。<sup>(8)</sup>これはムラや垣内という枠組レベルの問題ではなく、集団の適正規模という大きな問題を含んだ社会生活における集団のもつ謎めいた部分であるように思える。この意味で森氏の問い掛けは今後に残された大きな課題である。

### 三、垣内の組織と集団

先に大柳生における垣内の領域をみてきたが、大まかに三地域の垣内に区分できることがわかった。では次にこれらの垣内の構成をみてゆきたい。

# 1、村落組織

大柳生の戸数は、『一九九〇年世界農林業センサス』によると百二十戸である。その内訳は泉町十三戸・塔阪四十戸・脇村町四十二戸・上手町二十五戸となっている。また農業集落土地（属地）をみると、泉町が田八畝・畑一畝、塔阪は田十八畝・畑三畝、脇村町は田二十四畝・畑四畝、上手町は田十三畝・畑二畝となっており、いずれも水田が占める割合は高くなっているのがわかる。ここ近年は、第二種兼業農家が大半を占め、農業就業人口も六五歳以上という高齢化をみせている。農業集落<sup>①</sup>は泉町・塔阪・脇村町・上手町の四つに区分されている。大柳生の生活単位である垣内と同一である。

現在の大柳生町の自治組織としては、まず自治会長が各垣内のまとめ役として存在する。垣内にはそれぞれクミガシラ（組頭）とよばれる者が一名ずついる（表1）。この組頭は現在では自治委員といい、その選出方法は戸口廻りの当番制や年齢順といったものがほとんどである。垣内の集会には必要に応じて開かれ、各家から一人ずつ代表が参加する（ほとんどは戸主）。そして、組頭が集会での意見のまとめ役となる。この集会には長老衆（事項で詳しく述べる）は原則として参加はしないが、協議事項で解決がつかないことがあったりすると相談役になったりするという。神社関係の雑事は、奉賛会ができる以前は組頭がその役をしていた。

また自治会費については、組頭が自治会長宅へ集まり区費割りを行な

表 1

垣内名	名 称	選 出 方 法	交代の時期	備 考
上 出	クミガシラ	選挙で選出 一年任期	7月14日 夏祭り	秋祭りのときに上出の御幣をもつ
泉	クミガシラ	年齢順 一年任期	4月22日 メイクサン	かつては人物本位で選出していた
塔 坂	クミガシラ	年齢順 一年任期	4月21日 メイクサン	
下 出	クミガシラ	当番制 一年任期	1月15日 新年会	ネンニョウを兼ねる
大 西	クミガシラ	当番制 一年任期	1月14日 新年会	かつては1月4日に交代していた
下 脇	クミガシラ	年齢順 二年任期	12月25日 コメヨセ	かつては1月7日の初座に決めていたこともある
上 脇	クミガシラ	年齢順 一年任期	1月15日 新年会	

表 2

垣内名	名 称	選 出 方 法	備 考
上 出	ネンニョウ	4人ずつの当番制 一年任期	勧請掛けの準備 初座の準備
泉	ネンヨウ ネンニョ	2名ずつの当番制 一年任期	勧請掛けの準備 座帳の管理
塔 板	ニンニョウ ネンニョウ	2名ずつの当番制 一年任期 (半年交代)	日待ちの宿をつとめる
下 出	ネンニョ	1名の当番制 一年任期	組頭を兼任する
大 西	ネンニョウ	2名ずつの当番制 一年任期	涅槃講の宿をつとめる
下 脇	ニンニョウ	5名ずつの当番制 一年任期	太鼓踊の準備など
上 脇	ニンニョウ (世話人)	4名ずつの当番制 一年任期	勧請掛けの準備

い、それから各組頭が一軒一軒集めて廻る。昔は家別の等級制で自治会費(区費)を集めていたが、現在は固定資産割と人頭割の二つで徴収している。その比率は半分である。人頭割の内訳は、二十歳〜六十五歳の男子 (一人前・一〇〇%)・二十歳〜六十五歳の女子 (七五%)・六十五歳以上の男女(半人前・五〇%)・二十歳未満の男女(なし)となっている。昭和三十年頃からこのようになったという。

その他に農業用水と飲料水の費用の徴収もある。各垣内はそれぞれイデセキとよばれる施設をもっており、そこから用水路を引いて田畑に水を入れるのである。イデセキの管理は水利組合が行ない、垣内から二人ずつイデモリが選ばれる。その管理費用は農業用水の場合はそれぞれの所有する田畑の反別割で、飲料水は人頭割で徴収する。故に他の垣内の者でも田畑を所有する地域によつては、他の垣内のイデセキから水を引かなければならず、その時は利用する垣内に反別に応じて水利費を支払うことになる。

また、各垣内にはネンニョウやネンニョ・ニンニョウとよばれる世話人がいて(表2)、主に講の宿を勤めたり勧請掛けの準備をしたりする。昔は垣内や村の協議事項などの結果を一軒一軒伝えて廻っていたこともあった。その選出方法は家毎の当番制で、人数は各垣内によつて多少の差はあるが複数で勤めている。



## 2、講集団

講集団については、現在、伊勢講や日待講・涅槃講・十九夜講・オバン講などが行なわれている。しかし、いずれも講田や講山といった物質的基盤に基づいた講ではなく、その都度費用を徴収したり、その構成メンバーも家や個人いったように様々である。

十九夜講は「若い嫁さんの娯楽の話し合いの場」ともいわれており、毎月十九日に垣内ごとに集まって電気代や水道代・新聞代を徴収する。オバン講には、息子が嫁をもらってその嫁に台所のことを譲ったら参加するという。その他、垣内単位に各家から一人ずつが参加するといったような日待講や、有志の家が行なっていたという伊勢講、あるいは大柳生全体で行なう春日講など様々な集団で行なわれている。また伊勢や愛宕・高野山への代参は、講とは別にフリアゲといわれるくじ引きで選出している。涅槃講は垣内によつて年寄の集まりであったり、子供の集まりであったりする。たとえば尋常小学校を六年間、尋常高等小学校を二年間の計八年間を勤める終わる頃に涅槃講の年頭となり、十六歳から青年団に入る。そして、二十五歳まで勤めるとその後は消防団に加入するという。

特に個人が構成単位となっている講集団で共通することは、世代ごとの年齢で区分されている集団であるということである。この涅槃講と垣内の座、さらには夜支布山口神社の座を分析した鹿谷勲氏は、「山口神社はもと上出の、立誓神社はもと西側（上脇・下脇・大西）の、境内社の戸隠神社（九頭神社）はもと塔坂のそれぞれ氏神、『垣内の宮サン』であるといい、それぞれをもち年寄衆がいる。例えば西側（上脇）では一五才で大字のザへ入る、一六才でネハン講（シャカ講）のヤドを勤め、一七才で『垣内のザ』へ入るという年齢階梯をみせている」（鹿谷 一九九〇）と指摘している。

## 3、親族集団

大柳生では本家分家の関係をオモヤ・インキョという。しかし、その関係も対等的なもので、本家が絶大な権力を握っていたということはなかった。地主と小作の関係についても、奈良盆地などにみられるような強力なものではなかったという。東高原における田畑の面積もわずかであり、巨大な地主層が生まれるほどの基盤がなかったわけである。集落景観をみても家屋・屋敷地の規模もみな同じようなたたずまいをみせている。

近年の分家は苗字が同じであるが、明治期の分家やそれ以前のものになるとオモヤ・インキョであっても苗字の異なる場合がある。伝承によると、明治の新しい時代になった時、それまで苗字を名乗っていなかった家も新しく苗字を名乗ることになり、自分たちの屋敷地がある場所の地名をとってその苗字にしたからであるという。本家と同じ苗字にしなかったのかは、明治の徴兵制度から逃れるための手段であったという。このような現象も本家と分家の系譜意識が希薄であったからこそ想定できよう。事実、イットウという言葉は存在するが、血縁の親戚のことをいうらしく、特に本家分家を示すものではないということである。なお、大和東高原における親族関係については、蒲生正男氏のトウマイリ慣行の研究（蒲生 一九五二）や三上勝也氏・山本剛郎氏の与力制度の研究（三上・山本 一九八五）があるが、今回は詳細な調査を行っていないので、今後の課題としておきたい。

#### 4、座集団

夜支布山口神社の宮座組織とは別に、垣内ごとに座が存在する。ここでは垣内の座（表3）と長老衆（表4）についてみてゆきたい。

##### ①上出垣内の事例

垣内で数え十五歳になった男子は、一月九日に開かれる（ハツザ）初座において座入りする。現在は一月十五日

②泉垣内の事例  
 垣内をめぐる村落祭祀と座  
 二〇五

表 3

垣内名	名 称	年 齢	日 時	場 所	備 考
上 出	ザイリ	数え16歳	1月15日	会 所	昔は1月9日
泉	ザイリ	数え16歳	10月17日	集会所	オトナイリともいう
塔 坂	ザイリ	数え15歳	4月21日		
下 出	-----			-----	垣内の規模が小さいためない
大 西	ミチツクリ	数え15歳	9月頃	個人の家	
下 脇	ザイリ	数え16歳	10月初旬	タキバンの家	
上 脇	ザイリ	数え17歳	2月初旬	個人の家	

表 4

垣内名	名 称	加入の名称	加入の条件	主な行事
上 出	五人衆	ゴニンナリ	年齢順の上から五名	初座、上出祭りの主催
泉	六人衆	ロクニンイリ	年齢順の上から五名	宮の清掃
北塔坂	年寄講 (五人年寄)	タキイリ	65歳以上の者	年に一回会食する
南塔坂			年齢順の上から五名	
下 出	-----			
大 西	五人衆	ゴニンナリ	年齢順の上から五名	春秋に会食する
下 脇	五人年寄	ゴニンナリ	年齢順の上から五名	モリサンの世話
上 脇	五人年寄	ゴニンナリ	年齢順の上から五名	小祀の世話

になった。初座は会所で行なわれ、座入りする男子は羽織と袴姿で酒を持っていた。そして、ネンニョウが用意した豆腐汁や魚などを垣内の戸主と共に会食した。養子にきた者もこの初座の時に座入りするが、そのときが十五歳とみなされた。最近では年齢順に座入りするようになったという。初座の費用は、一戸割りで三升三合ずつ集めていたという。集まったうちから五升ほどをゴニンシユウ（五人衆）に渡していた。

五人衆とは、垣内の座に入っている者のうち年長者から五人のことをいい、終身制である。五人衆に加入する時は、新たに加入する者が他の五人衆（実際は四人）を自宅に招きもてなすという。五人衆の役目としては、垣内の問題が寄り合いで解決しなかったりした時の相談役になったり、氏子総代を五人衆の中から出すこと

泉の場合は、氏神である多聞神社の秋祭に座入りが行なわれる。その夜に戸主たちがガクヤとよばれる神社の集会所に集まり、数え十五歳になった男子の座入りが行なわれる。当番の者が大豆や鰯・柿・栗・餅などを用意して、これを肴にして御神酒をいただくのである。座は年長者から座つていき、一老から披露され挨拶をする。そして座入りした順番にネンニョが管理している座帳に名前を記入されるのである。養子に來た者は、例えば二十五歳であつてもその年が一歳としてみなされるため、座入りは十五年後になる。分家をした者は既に十五歳の時に座入りしているため、新たに家を興した時に座入りすることはない。この座入りした順番に最年長者から六名がロクニンシユウ（六人衆）と呼ばれている。一老は毎月の一のつく日に多聞神社にお参りする。

### ③塔阪垣内の事例

塔阪は垣内の規模が大きいため北塔阪と南塔阪に分かれており、座入りも別々に行なわれ、組頭も別に選出している。座入りは数え十五歳の男子が四月二十一日に行なう。このとき同時に組頭の交代も行なわれるのである。そして、この座入り順の年長者から上位五人がゴニンドシヨリ（五人年寄）とよばれている。

ただし北塔阪は今から四、五十年ぐらい前に、正月のトンドサンの際に年寄講をしようという話になり、六十歳以上の年寄が集まることになったらしい。Hさん（明治三十七年生）が六十五歳になった時に、年寄講の加入が六十五歳以上になったという。六十五歳になった人はタキイリといい、他の年寄たちを招いてもてなす。その年の該当者がいない時は、順番に年寄講の中を廻していくという。

### ④大西垣内の事例

大西では秋の取り入れが終わってから座入りが行なわれるが、特に毎年一人ずつしか座入りできず、多数の時は

生年月日順に座入りする。養子の者はその年に垣内で座入りする者がいると翌年にまわされるという。大西は下脇の分家の者が大半を占めており、モリさんや祭祀物も特になく、ゴニンシュウ（五人衆）は春と秋にタキバンの家に集まって会食するぐらいである。五人衆に欠員が出来れば次の者が加入する。これをゴニンナリという。

### ⑤下脇垣内の事例

十月初旬の道作りの日に、数え十六歳の男子の座入りがタキバンの家で行なわれる。タキバンはゴニンドシヨリ（五人年寄）の中で座順によつて廻される。五人年寄は道作りには参加せずご馳走をよばれ、午後の本座には羽織を着て上座へ座る。そして、祝儀として二万円くらいを垣内の会計からもらう。この本座には各家から一人しか参加できず、父親が隠居して所帯を息子に譲つていても座に入つてゐる限り、その息子は本座には参加できない。本座では、それぞれが座順に従つて座り、座入りの式が行なわれる。この座入りによつて垣内の衆としての交際が認められるのである。この座順の最年長者から五人を五人年寄と呼び、五人年寄に加入することをゴニンナリという。特に加入の日は決まつていない。

### ⑥上脇垣内の事例

上脇は昔、数え十七歳になつた男子が二月初旬頃に座入りをしていたらしいが、特に座入りの式はなかつたという。そして、座入りした者のうち最年長者から五人をゴニンドシヨリ（五人年寄）とよんでおり、終身制のため死亡者が出るか座を引いた者が出ないかぎりは新たに加入できなかつた。昔は垣内のことをこの五人年寄に相談したり、なかでも一老には權威があつたという。現在は、チジュウサン（本社は愛知県知多半島の知立神社）を四月一日と九月一日の二回、箒と鍬を持つて掃除をし、神饌や洗米を供えてお祀りするのが主な役目である。午前中に

祀り終えて、午後からはタキバンの家に集まって一杯飲んで会食をする。この費用は垣内から補助金として支払われる。

## 5、垣内の構成原理

蒲生正男氏の当屋制概念を検討した森謙二氏は「(一) ムラの祭祀的空間における平等性がムラ全体の平等性の原理にまで高められていること、(二) ムラの多層的な構成のなかで、家の平等性を存在することを承認しながらも、むしろムラあるいは祭祀集団の内部秩序としても、家族集団においても、年齢階梯制ないしは世代階層的な構造が顕著にみられるように思われる。祭祀空間における平等性というのは、祭祀空間への参加する資格を持つ人々の平等性であり、それは本来的にはムラ人としての平等性と一致していただであろうと思われる。(中略) 宮に仕える資格を持たない人々はこの平等性の枠組みから排除される。この社会的分化の問題は村落構成にかかわる問題である。家の平等性の問題はこの祭祀空間の平等性とは異なったレベルの問題である。家の平等性はムラに対する権利・義務の平等性であり、典型的には入会地に対しての資格の平等性の問題として現象する。村落が家によって構成され、その凝集力が強い村落では、個々人は家の構成員として登場し、個々人の個性は問題とはならない。

(中略) 針や吐山の都祁の村々ではこのような家の凝集力の強さは見ることができない。『他氏子』『外氏子』など言うことばに代表されるように個々人の個性や経験が問題とされ、個々人のある一定の条件のなかで生まれ、年齢に応じたムラが定めた通過儀礼を経過することによって、その地位を確保していくのである。これが『ムラの祭祀空間における平等制』がムラ全体の平等制の原理にまで高められている』という意味である。そして、この祭祀空間の内部秩序が年齢階梯制ないしは世代階層的な原理に基づいて秩序づけられているのである」(森 一九九七)と指摘する。

以上が森氏の大和の都祁村における村落共同体の把握の結論である。ここで重要なことは、家の平等性が形式的平等性であり、祭祀空間における個人の平等性が実質的平等性であるという把握である。言葉をかえていえば、個人の祭祀空間における平等性がムラ全体の平等性になっているということである。本論の展開上、宮座組織を分析してないのでこの指摘の可否を考察することは出来ないが、重要な指摘であると思われる。

では、これまでみてきた大柳生ではどのような関係が存在するのであろうか。垣内の村落組織から伺えることは、形式的平等と実質的平等という二つの平等関係が使い分けられているということである。自治会長はともかく、各垣内の組頭はほとんど当番制と年齢順で選出されており、ネンニヨウとよばれる世話人も家毎の当番制で勤めている。これらは形式的平等である。自治会費の徴収については、組頭が自治会長宅へ集まり区費割りを行ない、それから組頭が一軒一軒集めて廻る。昔は家別の等級割で区費を集めていたが、現在は固定資産割と人頭割の二つで徴収する。その他に農業用水と飲料水の費用徴収について農業用水の場合は田畑の反別割で、飲料水は人頭割で徴収する。以上からは実質的平等関係が伺える。

次に垣内の祭儀集団をみると、長老衆の座集団、涅槃講や十九夜講・オバン講といった講集団は、世代区分という年齢によって実質的平等関係によって構成された集団だということである。長老衆は現在では、垣内に対して権限を持っているわけではなく、主に垣内の祭祀物の世話をしたり、年に何回か集まって会食するのがその主な役目である。垣内によって形骸化したものや娯楽集会になっているものもあるが、本来は初座や本座においては座の席順が決まっており、いわば垣内の構成員としての順番がそこに示されていたことは想像できよう。そして、独自に氏神伝承をもつ垣内も存在することからも、垣内の独立した結集原理も伺えるのである。

以上のように垣内は形式的平等と実質的平等が入り交じった関係で成り立っているのである。この平等性もたらされるのは、「ムラ人」であるという認識が必要であることはいうまでもないことである。

## 五、結びにかえて

本稿においては、大柳生における垣内の領域と構成についてみてきた。大柳生の日々の生活は、垣内を基本単位として行なわれている。

大柳生の垣内の領域を村落祭祀の観点からみると、上出垣内、西垣内（上脇・下脇・大西垣内）、塔阪垣内・下出垣内、泉垣内の四地区に分けることができる。それは氏子総代の選出範囲や太鼓踊の伝承されている範囲等の夜支布山口神社に関する祭祀共同体の区分であるともいえる。泉垣内は氏神を別にしているため、この祭祀共同体には含まれないと考えられる。しかし、生活地域集団としての垣内の結合であるならば、泉垣内も大柳生の構成単位の一つとして存在するのである。垣内の儀礼は垣内独自のものと、共同で行なうものがある。ある時は結合しある時は分裂するという柔軟な構造が見受けられる。

垣内の村落組織をみると、各垣内には組頭が置かれ自治会長や各垣内同士の連絡に廻ったりする。垣内の行事を差配するのは、ネンニヨウとよばれる当番の者である。いわば組頭が外向きの役でネンニヨウが内向きの役といえる。そのいずれもが平等に当番制（年齢順や家並み順など）で勤めていくのである。垣内の人足は各家から代表が一人出る。垣内ごとの区費（自治会費）の徴収は、かつては家別の等級割であったが、昭和三十年頃から半分は固定資産割で残りの半分は人頭割になった。

垣内における祭儀集団をみると、子供たちは涅槃講の年頭を終えると、だいたい十五く十六歳で垣内の座に加入する。この座入りによって、垣内での一人前の交際が認められるのである。そして、座入りした者のうち年長者から上位五人を五人衆や五人年寄とよぶのである。昔は五人衆には威厳があったといい、寄り合いなどで解決しないことは相談にのつたという。現在は祭祀物の管理や会食をするのみで政治的な発言権などはもっていないが、



祭祀的な役割は今でも続けられているのである。この座に参加できるのは各家から一人であり、たとえ戸主であろうとその父親が座に入っているのなら参加できない。それぞれの垣内に伝わる座に参加することが垣内での一人前の交際が認められる時であり、垣内の秩序はその座順によつて保たれていることは推察できよう。座や講は物質的基盤にもとづいたものではなく、必要に応じて各家から平等にその費用を徴収している。

このように垣内社会には、当番制という形式的平等による村落組織と年齢・世代という実質的平等によつて編成された祭儀集団が存在するのであった。しかし、祭儀集団が全部実質的平等かというとはなく、長老衆によつて構成されている座集団は形式と実質が入り交じった構成原理であると考えられる。それを象徴しているのが座順である。座入りの順番は生まれた順という意味では実質的平等であるが、一軒から一人だけしか参加できないというのは形式的平等といえるからである。ここに垣内社会における家意識が露呈しているものと考えられよう。

本論は対等的・平等的関係がみられる近畿型村落の事例研究であるが、垣内社会における形式的・実質的な平等関係はある程度明らかになったであろう。しかし、その背後に潜む緊張関係や葛藤には触れることは出来なかった。今後も平等的関係にみられる緊張・葛藤状況の中での座順がもつ意味を解明してゆきたい。その意味でも祭儀における座順の分析が重要な意味をもつであろう。大字の座（夜支布山口神社の座）と垣内の座が何故二つも存在し続けられてきたかということは、大きな疑問である。「座」という集団がある緩和機能を果たしていたとするならば、大字と垣内という二つの集団には独立した集団結集原理が働いているとみなしえないだろうか。

## 注

(1) 座や座順を伴う組織・集団は宮座に限ったことではないことはいうまでもない。村落運営や祭祀的場面で序列が座順（座席の順番）に顕著にあらわれてくるというこ

とは注目していい現象なのではないだろうか。この時の序列が村落の社会生活とどのように密接に結びついているのかは、それぞれの事例研究で明らかにしてゆくしかないと思われる。

## (2)

宮座と村落構造との關係を考察した古川彰氏は、当屋制村落の批判として宮座組織における「平等の二重構造」を指摘している。すなわち、「近畿村落の構造は一見対等・平等のようにみえながら、村落内部では複数の、おそらく宮座に参加できる本家筋による支配層グループとそれ以外のグループの二重構造が存在し、それを補償するようなかたちで、蒲生氏のいうように『葬儀の執行、神社祭祀の運営、公共の道作りなどが各世帯の順番によつて営まれ』るような構造ができていたのではないだろうか」(古川 一九八五)というものである。後の研究でも「これらの村は一見フラットで平等であるかのように見えて、じつはその内部は宮座の上層と下層の二重に構造化されており、それは神事をつうじてかなり根強く生き残るようなものであった」(古川 一九九四)と指摘している。これらは当屋制村落概念の対等的・平等的原理に疑義を挟むものと思われる。この点は同感なのであるが、ただ筆者の場合は、対等的・平等的原理という場合の実質的・形式的という二つの側面に注意を払っている。

## (3)

上野誠氏は大和地方の宮座から突出をめぐる葛藤を考察している。宴時の酒食に関する詳細な取り決めから突出を防止する工夫を発見するのである。すなわち「群を抜く突出させる工夫の背景には、生活改善運動に代表されるような考え方、つまり『虚礼』を廃止して誰もが参加できる祭りの形態を求める潮流があると思われるが、

## (4)

一方では座員の負担平等という考え方も基底にあるものと思われる。加えて、座の行事のあり方そのものを時代に対応させようとする考え方もその背景にはあるだろう。研究の見通しとしては、こういった突出をさせる宮座の文化の存在をまずは見極め、さらにはどのような時その『タガ』が外れるのか、考える必要があるだろう」(上野 一九九五)と述べている。突出防止の背景に、伝統的な宮座の平等的原理が働いていることに着目するわけである。本論との関係からいうと、筆者はこの伝統的な平等的原理の背後に潜む葛藤・緊張關係に関心があり、その緩和システムとしての宮座の意義を明らかにしたいと考える。

## (5)

竹田聰洲氏の手法は、いわゆる歴史民俗学とよばれるものである。近年、『竹田聰洲著作集』(国書刊行会 全8巻)が完結し、その全貌をうかがうことができるようになった。各巻の解説で、竹田聰洲氏の歴史民俗学の紐解きが行なわれているが、全巻を通した研究史整理は行なわれているとは言いがたい。筆者が受けた印象としては、柳田民俗学の発想を(特に祖先信仰に顕著に見受けられる)文献史料を補って実証したところに意義があると思うのである。この詳しい分析は別稿に譲りたい。

蒲生正男氏の当屋制村落の概念把握(家の対等的・平等的關係)の有効性については二つの意見がみられる。一つは上野和男氏に代表されるように、当屋制概念そのものを「家」の対等的・平等的原理として位置付けるもの

である(上野 一九九二)。二つ目に、他の村落類型の指標が個人の権威の源泉にあり、当屋制村落の指標は家にあるのであるから整合しないというものである。福田アジオ氏はそれに変わって個人の指標から村落を捉え直し、「番」と「衆」という分類を提示する(福田 一九九〇・一九九七)。

(6) 伝承によると、オセドサン(大先祖)は下脇垣内の氏神であつたといひ、その祭日は毎月の六日である。かつては五人年寄が毎月掃除をしていたのだが、現在は三ヵ月に一回くらいになつたという。また、下脇垣内は大柳生の中で一番最初にできた村であるといひ、大西垣内は下脇の分家、上脇垣内は岩本という部落から移つてきたといわれている。

(7) 大和の男女別・年齢別墓地については中田太造氏の研究(一九九一)に詳しいが、近年では森謙二氏によつてその慣行は年齢階梯制墓地と命名されている(森 一九九三、九九頁)。また、同墓地を考察した論考に関沢まゆみ氏の研究がある(関沢 一九九七)。

(8) 村落社会にみられる社会集団を分析した赤田光男氏は「ムラは一つの運動体であるから、目的に応じてまとまり方が変化する。ある時はムラ全体でまとまり、またある時は諸集団ごとにまとまって行動する。いわば『結び換え』の行動理念が如実にみられる。一村内に臨機応変にグループ別の行動があることは、ムラに一種の緊張をもたらし、それが秩序を保ち続ける限りにおいては問題

はなく、むしろ所屬員にとつてみれば重要な再生活動となるが、もし諸集団の不和が生じて悪化すると、ムラ全体の発展には大きな阻害となつた。一般に近世社会は諸集団の活動を生かしつつ、ムラ全体でまとまって行動する『結び換え』の行動理念が働いた'(赤田 一九九五)と指摘する。

(9) ここでいう農業集落とは、「一般に『ムラ』、『郷(こう)』、『作り(つくり)』、『地下(じげ)』、『村内(むらうち)』、『組(くみ)』などとよばれているものでも」と自然発生的な地域社会であつて、家と家とが地縁的、血縁的に結びつき、各種の集団や社会関係をかたちづつてきた農村における基礎的な地域単位である(農林水産省経済局統計情報部 一九八一)。

#### 【参考文献】

・赤田光男

一九八八年『家の伝承と先祖観』人文書院。

・市川秀之

一九九五年『日本村落信仰論』雄山閣。

・福田アジオ編

『講座日本の民俗学3 社会の民俗』雄山閣。所収。

一九九八年『山間盆地集落の空間構成―貝塚市蕎原の空間論的分析―』『日本民俗学』二二。

・今崎勝治郎編 一九五八年『大柳生村史』。

・上野和男

一九九二年『日本民俗社会の基礎構造』ぎよ

うせい。

## ・上野 誠

一九九五年「宴をめぐる〈競争〉と〈規制〉——ヤマトの宮座から——」（『第四七回日本民俗学会年会研究発表要旨』）所収。

## ・蒲生正男

一九五二年「社会構造——大字吐山に於ける家族・親族・垣内の考察——」（『奈良県総合文化財調査報告書〈都介野村編〉』奈良県教育委員会）所収。

一九五六年「伊豆伊浜部落の村落構造（分担執筆）」（鈴木二郎編『都市と村落の社会学的研究』世界書院）所収。

一九七八年「増訂・日本人の生活構造序説」ペリカン社。

一九七九年「日本のイエとムラ」（『世界の民俗13東アジア』平凡社）所収。

一九八一年「日本の伝統的社会構造とその変化について」（『政経論叢』三四—六）。

## ・川井景一編

一九八五年「復刻版 大和国町村誌」名著出版（初版は一九九一年『大和国町村誌集』廣成館より）。

## ・岸田史生

一九九三年「大柳生町」（『奈良市年中行事調査概報(3)——平成四年度——』奈良市教育委員会）所収。

一九九五年「座をめぐる民俗社会——村落類型論からみた近畿地方の村落——」（『近畿民俗』）

一四二・一四三。

## ・佐々木聖佳・廣井榮子

一九九〇年「大柳生の太鼓踊」（『奈良市民俗芸能調査報告書——六歳念仏・風流・語りもの——』奈良市教育委員会）所収。

## ・鹿谷 勲

一九九〇年「大柳生・夜支布山口神社のガクウチとスモウ」（『奈良市民俗芸能調査報告書——田楽・相撲・翁・御田・神楽』奈良市教育委員会）所収。

一九九三年「大和東山中の祭りと芸能」（植木行宣・樋口昭縊編『民俗文化分布圏論』名著出版）所収。

## ・関沢まゆみ

一九九七年「村と墓——墓の共同利用と年齢秩序——」（『民俗学評論』一一一）。

## ・高田十郎

一九二一年「大和大柳生の賀當踊」（『民族と歴史』六—四）。

## ・竹田聴洲

一九七一年「民俗仏教と祖先信仰」東京大学出版会。

## ・中上武二

一九七四年「式内社夜支布山口神社とその共同体」（池田源太監修『古奈良』）所収。

## ・中田大造

一九九一年「大和の村落共同体と伝承文化」名著出版。

## ・中村政則

一九九八年「労働者と農民——日本近代をささえた人々——」小学館ライブラリー（初版は『日本の歴史二九巻』一九七六年 小学館よ

り。

・奈良県史編集委員会

一九八六年『奈良県史12民俗(上) 大和の伝承文化』名著出版。

・奈良市史編集審議会

一九六八年『奈良市史民俗編』吉川弘文館。

・農林水産省経済局統計情報部

一九八一年『一九八〇年世界農林業センサス 奈良県統計書』財団法人農林統計協会。

・原田敏明

一九七二年『宗教と社会』東海大学出版会。

一九七五年『村の祭祀』中央公論社。

一九七六年『村祭と座』中央公論社。

一九八〇年『村の祭りと聖なるもの』中央公論社。

・肥後和男

一九六八年『復刻版 宮座の研究』弘文堂(初版は一九四一年、弘文堂書房より)。

・福田アジオ

一九八二年『日本村落の民俗的構造』弘文堂。

一九八九年『時間の民俗学・空間の民俗学』木耳社。

一九九〇年『可能性としてのムラ社会―労働と情報の民俗学―』青弓社。

一九九七年『番と衆―日本社会の東と西―』吉川弘文館。

・堀井甚一郎

一九六二年『最新奈良県地誌』大和史蹟研究会。

・古川 彰

一九八五年『宮座と村落構造』(安藤精一編『紀州史研究―藩政史特集―』国書刊行会)所収。

一九九四年『ふたつの宮座の変容過程―宮座型村落論―』(井上忠司・祖田修・福井勝義編『文化の地平線―人類学からの挑戦―』世界思想社)所収。

・町田葉子

一九九七年『越後秋山郷における庚申講の形成過程―オオド・コド・マゴトから―』『日本民俗学』二二二。

・三上勝也・山本剛郎

一九八五年『与力制度と村落構造―大和高原村落の社会学的研究』多賀出版。

・森 謙二

一九九二年『総墓の諸形態と祖先祭祀』『国立歴史民俗博物館研究報告』四一。

一九九三年『墓と葬送の社会史』講談社現代新書。

一九九七年『共同体・宮座・家族―奈良県山辺郡都祁村吐山・針報告書』。

一九九七年『社会関係としての講集団の組織化―二つの岩室村の伊勢講』『日本民俗学』二二二。

・森本一彦

## 【付記】

本論は、一九九三年に佛教大学大学院文学研究科に提出した修士論文の一部をもとに、第四九回日本民俗学会年会（一九九七年 於 東京家政学院大学）で発表した原稿を加筆・修正したものである。